独自の「開倫塾エコシステム」で、全塾生の自己学習能力を伸ばし、

株式会社 開倫塾

栃木県足利市

林 明夫

代表取締役・塾長

開倫塾

小学部　KAIRINブロードバンド予備校
中学部　KAIRIN-NET専門校　ほか
高校部

キャリア教育で自覚・自律を促し、主体的な自己学習能力を育成する

私たち開倫塾は、「全塾生、第一志望　大幅アップ」「全塾生、3大検定（英検・漢検・数検）合格」を目標に掲げています。指導によりこの目標を達成し、生徒増・売上増へとつなげる好循環を生み出すべく、「開倫塾エコシステム」と名付けたシステムづくりに取り組んでいます。

「開倫塾エコシステム」の第一ステップは、開倫塾の教育目標でもある「自己学習能力の育成」です。①塾生全員の自覚を促す、②学校がある日は1日8時間、学校が休みの日は1日12時間学習させる、③効果の上がる学習方法を伝授する、④「辞書・新聞・読書」で読解力を高める、の4つから成ります。肝になるのが①です。自覚しろと人から言われて自覚が芽生えるわけはなく、塾生の自覚を促すことが私たちの仕事の一つです。開倫塾ではいわゆる「キャリア教育」を重視しており、自分はどうなりたいか、何のために学ぶのかを生徒自身が深め、今やっていることと将来を結びつけて考えることを大切にしてきました。勉強に対して自分なりの意味づけができると、生徒はルールを定めて秩序をもって行動できるようになる、つまり、「自律」できるのです。

学習者としての自覚ができたら、効果的な学習方法を伝えます。勉強は質に加えて量も大事ですので、学校がある日は1日8時間、学校が休みの日は1日12時間学習することを目標に、教室は毎日22時半まで開けています。自学自習を促しており、授業がない日も空き教室で勉強に励む姿が見られます。

生徒増・売上増につなげる好循環を生む

「辞書・新聞・読書」で読解力を高め、入試対策プラスαの真の学力を身に付ける

④の「辞書・新聞・読書」で読解力を高めるというのは、私たちが以前から力を入れてきたことですが、昨今の大学入試の状況を見ると、読解力はまさにこれから必要になる能力だと感じます。例を挙げると、今年の共通テストの英語リーディングの問題は、問題文から設問まで合わせて35ページにも及びます。それを80分で読み解くわけですから、相当な読解力とスピードが求められます。また、数学（Ⅰ・A、Ⅱ・B）も問題文が長文化し、文章を読んで設定を理解し（読解し）、それを数学的な視点で分析して正解を導く…という力が求められます。国語はもちろん、理科や社会についても同様に、読解力が求められる問題です。

こうした大学入試の変化を受けて、公立中高一貫校の適性検査や全国学力調査の問題においても、読解力重視の傾向が色濃く見られます。世界標準の「PISA型学力」の養成を狙ってのことであると理解しています。この方向性は、教育のあり方として間違っていないと思います。

一方、高い読解力を身に付けるための近道はなく、物理的な「学習量」が必要です。学校の授業だけでは不十分であり、学校の授業で基礎を学んだうえで、たくさんの文章を読み、問題を解くトレーニングをする必要があります。そして、その役目を担うのが塾です。例えば英語なら、まずは英検の過去問10年分（30回分）をやり、慣れてきたら英字新聞を読む。日常的に新聞を読んだり読書をしたりすれば、共通テストレベルの分量なら十分に対処できるだけの読解力が身に付きます。そして、新聞や書籍を通して得た知識や言語能力は、大学に入ってからも、社会人になってからも活きてきます。

こうした取り組みの結果として、「全塾生、第一志望合格」「全塾生、学校成績（校内順位）大幅アップ」「全塾生、3大検定合格」を達成するのが、「開倫塾エコシステム」の第二ステップです。

塾の運命を左右するのは「生産性」塾にできることは、まだまだある！

そして、塾生が出した結果により、生徒数が増え、塾の売り上げが上がるのが、「開倫塾エコシステム」の第三ステップです。生徒が勉強に費やす時間が増えることで、生徒一人当たりの金額（単価）のアップにつながる、ということも含みます。これまで学習塾業界では、「生産性」があまり重視されてきませんでした。教育業界全般に言えることかもしれません。しかし、少子化がますます進むこれからは、いかに生産性を高めるか、という視点が塾の運命を左右することになるのではないかと考えます。

私自身も参加させていただいた、栃木県生産性本部と連合栃木の共催による「生産性セミナー」は、大変示唆に富んだ内容でした。生産性とは、自分たちが持っているもの（人・モノ・金・情報・土地など）をいかに有効に活用し、結果を出すことができているかを測る指標です。具体的には、分母を投入（インプット）、分子を算出（アウトプット）とする数式で表されます。例えば、1億円を10人で稼げば、1人当たりの生産性は1,000万円です。

塾に当てはめて考えてみましょう。子どもの数が減るなか、どうしても分子（授業料）は減ってしまいます。生産性を落とさないためには、分母を適正にする必要があります。従業員の数を減らすという施策もありますが、それでは従業員の満足度が下がってしまいます。機械化、自動化やAIの活用による業務プロセスの改善や働き方改革などと並行して、従業員の能力開発や意欲の向上にも努めることで、投入の質を改善することが重要なのです。

同時に、分子を増やす工夫も必要です。数（生徒数）の増加が見込めないのであれば、単価を高めるしかありません。そして、単価を高めるには、新しい商品・サービスの開発など何かしらの付加価値を提供することが不可欠です。例えば、「過去問10年分コース」というのも、十分にあり得る選択肢ではないでしょうか。

入試の出題傾向が変わったのであれば、そこに新しいニーズが生まれているはずです。学校へ行かないという選択をする子どもが増えているのであれば、通信制教育への関心が高まっているはずです。新しいサービス、新しい市場だけでなく、既存のサービスの質の向上や既存客の見直しでも気づきがあるはずです。誰もやったことがないからやらないだけで、塾にできることはまだまだあると私は確信しています。

学習塾業界の皆さま、今こそ学習塾ができることを共に考えてまいりましょう。

CRT栃木放送『開倫塾の時間』林明夫の歩きながら考える　2024年2月24日(土)放送内容資料

生産性を向上させるには、どうしたらよいか

開倫塾
塾長　林明夫

◆生産性＝$\frac{\text{産出}}{\text{投入}}$＝$\frac{\text{成果(生産高、顧客数、売上高、付加価値など)}}{\text{経営資源(人材・資本・技術・情報・土地・エネルギーなど)}}$

(労働)生産性＝

OutPut（分子）
①「生産量・顧客数の拡大」、「売上付加価値の増大」
②「新商品・新ビジネスモデル開発」(イノベーション)
③「新市場」、「サービス」、「新しい顧客」の開拓
④「ブランド価値」、「企業イメージ」の向上
⑤「顧客満足」、「リピート率」の向上

InPut（分母）
①時間講師を含め、「社員ひとり一人の能力開発」、「社員満足の向上」
②「機械化」・「自動化」・「仕組み化」(AIの活用など)
③「業務プロセスの改善」
④「デジタル技術(DX)」・「ビックデータ」の活用など

◆ポイント

①「働き方改革」
②「人材育成」
③「人的資源投資」

◆生産性向上を実現するには、産業・企業の実情や課題に応じて、

①より多くの「成果 (OUTPUT)」を生み出す
②「投資 (INPUT)」の質の改善（または、効率化）
　・この２つに取り組むことが重要
③投入の増加以上に産出を増加させるという着眼点が重要
〇分母「投入（インプット）」と、分子「産出（アウトプット）」の増減に着目しよう!!

出典：公益社団法人日本生産性本部